

シリーズ 私の一冊の本

看護学部 松岡恵 先生

オリヴィア・ジャドソン著 渡辺政隆訳 『ドクター・タチアナの男と女の生物学講座』

閲覧室 2階 481.35/J 88 光文社 出版

本書の英文タイトルは、『Dr. Tatiana's Sex advise to all creation』（全ての生物に対するタチアナ先生のセックスアドバイス）です。内容は、擬人化された動物たちの「身の下相談」にタチアナと名乗る怪しげな「先生」が回答するものです。とはいえ、決して興味本位の書籍ではありません。著者は、米国のスタンフォード大学を卒業し、ロンドン大学インペリアルカレッジ研究員を経て、サイエンスライターとなった科学者です。そして、巻末には80ページにわたる参考文献リストが掲載されている、きわめてまっとうな科学読み物です。

本書では、各章の始めに仮名の相談者、例えば「ガボンの悩める少女（実はゴールデンポット）」、「クローバー畑の悩める女王（実はミツバチ）」、「マレーシアの自信喪失ボーイ（実はハエ）」が書いた軽いノリの相談を提示し、次にタチアナ先生の回答が続きます。タチアナ先生の回答は、ある時は諭すように、ある時は同情的に、相談者に語りかける形式です。まさに新聞や雑誌の身の上相談です。ですから、私たちも、本書を読むと、相談者（実は人ではない）の不思議な性の悩みに対し「世の中にはそういう悩みを持つ人もいるのね」と感じ、タチアナ先生の回答を「なるほど、なるほど」と納得(?)させられるのです。

ところで、怪しいタチアナ先生の回答は、実は、生物にとっての生殖の意味、すなわち種の保存と種の繁栄という原則にのっとり、相談者の悩みの種である異性の行動を解説したものです。タチアナ先生は、雄は自分の子孫を数多く残すこと、雌はなるべく優秀な遺伝子を持つ雄と交尾することが動物の生殖行動の原則であることを繰り返し語ります。このような、生物としての本能的欲求は、人間も同じはずですが、このことを私たちは忘れていました。ところが、本書を読み進めていくと、人間も動物の一つであり、動物たちの「交尾」は実は「セックス」であり、私たちの「セックス」は実は「交尾」などと改めて気付きます。それにより、今まで忘れていた私たちの生殖行為にともなう生物としての根本的意義：「種の保存」、「種の繁栄」に気付かされるのです。そしてヒトは、他の種と比較して、生物として生殖行動にどのような特徴があるのか、冷静に見つめ直すことができるのです。

この本は、なによりも単純におもしろいです。そして、知的満足も満たしてくれます。各章が短く、拾い読みがしやすいというメリットもあります。相談者のプロフィールとなるイラストも、動物好きのかたには楽しめます。ご興味のある方は、是非ご一読ください。